

違う景色 でもうれしい

八戸5カ月ぶり演劇公演



客席を減らし、隣の席との間にビニールシートを設置して行った演劇公演。公演後の撮影も距離を保って行った＝17日午後8時すぎ、八戸市

八戸市の多目的スタジオ「スペースベン」で17日、約5カ月ぶりとなる演劇公演が行われた。新型コロナウイルスの感染拡大に伴

い、2月末から演劇公演を中止していたが、客席を減らし換気を行うなどの対策を施した上で再開した。県内でも演劇公演を再開して

いないところが多いが、同スタジオを主宰する田中勉さん(59)は「生でしかやれないものがある。最大限の対策をしながら続けられれば」と話した。

この日上演したのは八戸学院大演劇部・高坂大誠さん(21)による一人芝居「コイの予感」(作・加藤健太郎)。スタッフ、演者、観客はスタジオの入り口で検温と手指の消毒を行い、マスクの着用を確認してから入場した。

スタジオは最大で60席ほど用意できるスペースがあり、今回のような一人芝居の場合、普段であれば20席用意するところを8席に限定した。首都圏で舞台クラスタが発生したことを受けて、客席間にビニールシートを設置した。

同スタジオでは1990年2月から、毎週金曜夜に芝居やダンス公演などを行う企画を続けてきたが、新型コロナウイルスの影響により中断していた。

今回の演劇公演に先駆け、6月19日と7月10日にダンス公演を実施したが、いずれも客席を減らし、密にならない状態を心掛けた。

一人芝居を演じた高坂さんは「舞台は5カ月ぶり。見える客席が普段と違ったが、いつも通りできた」と語った。観劇した南部町の会社員江刺家佐智子さん(41)は「(客席間のビニールシートなどについて)芝居が始まると気にならなかつた。公演の再開は希望の光。うれしい」と話した。
(山谷佳澄)